

日本居住福祉学会編

# 強制移住・ 強制立ち退き

## 居住福祉研究17

2014年5月

- ◇巻頭言 認知症の人の居住環境と留意点 渡辺 光子
- 特集:強制移住・強制立ち退き
- 特集として「強制移住・強制立ち退き」をとりあげるにあたって
- 原発事故による避難と居住に関する課題 大本 圭野  
原発震災から3年、福島の実状と課題 塩谷 弘康  
震災から3年「県外避難者への住宅支援」 伊東 達也  
公営住宅の追い出しの実態と課題 古部真由美  
応能応益家賃制度とは何か 小池田 忠  
美濃 由美
- 居住福祉評論
- 国民不在の医療制度改革 山路 克文  
スウェーデン住宅政策小史 高島 一夫
- 2013年9月宇和島研究集会報告
- 精神障がい者の地域居住をどう支えるべきか 神野 武美

## 居住福祉の本棚

## 『脳が若返る 家作り 部屋作り』

天野彰、廣濟堂出版、本体価格 1400 円

評者：早川和男(神戸大学名誉教授)



テレビの住宅改造番組『ビフォーアフター』の常連建築家・天野彰さんの新著である。

著者は言う。「『脳が若返る』とは、非常に建築学的なテーマです。これまで3千軒を超える住宅・建築を手掛けてきたが、家が完成に近づくにつれ、建主がどんどん若返っていく。『家を建てる』こととは脳を活性化させることだったのです」。この事実を“発見”してから、「私は『脳の若返り』—『ワクワクさせる家』『楽しく暮らす仕掛け』『心地のいい家』は、家造りの最大のテーマとなりました」。

そして著者は呼びかける。“長生きする家づくりをしませんか”“脳が活性化する「ボケない家」をつくりませんか”と。評者は、残念ながら脳を活性化させる家づくりの機会も持てなかったが、住居が人間の心身にあたえる影響に関心を持ってきた者として、共感する点が多い。

著者は、こんな例をあげる。「ボケない家とは」——住んで楽しい家、ワクワクする空間、それは「心が悦ぶ家で、健康やボケ防止の心身の能力を高める」。

バリアフリーの家は便利すぎて、身体の衰弱から脳の退化を招く。2～3センチぐらいの段差はつまずきやすいので平らにした方がいいが、階段のようなはっきりとした段差は足腰を鍛えるために積極的に活用すべきで、それが“リハビリ”なのです、と。

また、認知症専門の小坂健司医師の言葉などが引用される—「病院で診察していると、会社を定年退職して自分の役割がなくなり、生きる目的自体を見失ってしまった、という人を多く見かける。うつ病を発症し、認知症へ発展するケースも少なくない。家にひきこもりがちの人や一人暮らしで他人と交流する機会の乏しい人も、うつ病や認知症になりやすい。専門医としての私の実感です」と。本書のテーマは居住福祉学の一環でもある。